

## vol.6

選書者：アサダワタル

(文化活動家／アーティスト、文筆家、近畿大学文芸学部教員)

### ●『質問』 著者：田中未知

コロナ禍に最も読み直した本です。365個の得も言わぬ「質問」が日本語と英語でシンプルにレイアウトされた書籍なのですが、例えばいままたまパッとページを開くと「高速道路は悲劇的ですか 喜劇的ですか」(266p)とか、「今あなたの立っている所を掘っていくとどこに出ると思いますか」(67p)とか出てきましたが、クサクサとした気分で過ごしている自分が宙に浮く感じがしてきます。アサダもこの本を原作にしてコロナ禍をテーマにしたコンサート作品も作りました。本当に何度でも出会い直したい素敵な本です。田中未知さんに感謝。

### ●『わたしたちの小さな世界の問題 ―新しい教育のために―』

著者：マリオ・ローディ／翻訳：田辺敬子

戦後の教育実践記録の中に、とてつもなくアートフルで自由すぎる教育をやっている事例が国内外にあるらしいと、友人のアーティスト 吉野正哲（マイアミ）さんに教えてもらって読んでみたのですが、本当にすごくて。冒頭近くの「一粒の種子のような一日」だけを読んでも、教師であるマリオさんと小学一年生の子供たちが、窓の外の空や風をきっかけにどこまでも想像力を羽ばたかせ、生き生きと同じ世界を共有していく様子がみてとれます。「日常」ってそれを乗り越えなす人間の態度によって、こうも伸び縮みするのかと思うと、もっと教育でやれることってありますよね。

### ●『表現のたね』 著者：アサダワタル

手前味噌でごめんなさい。『わたしたちの小さな世界の問題』を取り上げた時に、僭越ながら自分の著作のなかで似たような感覚が宿っている本があるなと思いましたので。アサダ自身が「日常」を過ごす中で、アーティストとかクリエイターとかそういう肩書きを傍に置いて、「表現」に対する当事者性ってどのように養うのだろうとずっと思ってきて、その答えを出すためにこの本を書きました。放っておいたらただただ流れていく「フローな日常」の中に潜む、実に取り留めのない「弱い表現」を掬い取って書いたエッセイのような私小説のような作品です。一人旅のお供にぜひどうぞ。

### ●『あなたを選んでくれるもの』 著者：ミランダ・ジュライ／翻訳：岸本佐知子

僕が「アートプロジェクト」と呼ばれる表現と「文章」という表現のより良き関係性を考えるときにずっと心に留まり続けている作品です。ミランダさんのような形で時に図太く、時に繊細に「他者」という存在に関わり、決して分かり合えはしないけど、それでも人が生きる上で、「他者も私の一要素であり、私も他者にとってその様に在りたい」と願わせてくれます。ああ、いつかこんなインタビュー集を書きたい！

●『人間の条件 そんなものない』 著者：立岩真也

今年の7月に残念ながらお亡くなりになった立岩さんの自伝的要素が詰まった思考の迷路のような本。能動的な意志によって、あるいは、その人が所有する何かで人間の価値が規定されるのではない、「ただ在る」という次元で「生きる」を考え抜くそのプロセスを、読書という行為において受け取ったそのライブ感たるや！自分の身体がリアルに軽くなったり、ズドンと重くなったりもう大変。文体にとっても特徴がある方ですが、「よりみちパン！セ」という中学生も多くの読者をもつシリーズゆえにすべてふりがな付き。多くの人にじっくり読んでほしい。